

透析医療におけるアートとサイエンス

花房 規男*

謹んで、新年のご挨拶を申し上げます。2019 年が始まりました。皆様どのような新年をお迎えになっているでしょうか。

本年の本誌 editor in chief を拝命いたしました。この「臨牀透析」も、第 35 巻を数えるに至りました。数年前から年間テーマを設定し、そのテーマを基本として、さまざまな方面から透析医療について議論いただいてきております。本年のテーマは、「透析医療におけるアートとサイエンス」とさせていただきました。

透析療法は、医療のなかでも、工学的な視点が重要な領域です。過去 50 年を超える透析療法の歴史を振り返ると、その歴史は、技術の進歩とともに発展してきたという点は周知のとおりです。今からちょうど 1 世紀前に Abel が行った、両側腎摘除を用いた腎不全治療に端を発した血液浄化療法は、100 年の間に開花し、最長透析歴をもつ患者では約 50 年間、腎臓の機能を肩代わりしてきているのです。こうしたサイエンスの進化については、透析技術そのものだけではなく、バスキュラーアクセス・ペリトネアルアクセスの進化、さらには、腎不全に伴うさまざまな合併症に対する治療の進化、さらには看護・栄養領域におけるサイエンスも現在の透析医療を支えてきています。

一方、透析医療においては、患者がいかによい治療を受

* 東京女子医科大学血液浄化療法科
臨牀透析編集委員会／2019 年度 editor in chief

けられるかという点が最終的なゴールでもっとも重要な点であって、工学的・医学的なサイエンスだけではなく、診断や診療の場面、看護、栄養などさまざまな領域でのアート(実臨床でどのようにサイエンスを用いるかという技術)が、よりよい透析療法の発展に寄与してきたことは疑いのない点であると考えます。

現在、透析患者の高齢化が顕著です。こうした高齢者や低栄養・消耗を認める患者では、より個別性をもった対応が必要とされていて、患者個々人に応じた透析療法の提供がより重要な点となってきています。このためには、患者とわれわれ医療者との間の「人と人との関係」が今までにも増して大きなウエイトを占めてくると思われます。

こうしたことから、今年度の年間テーマを設定いたしました。さまざまな領域の技術を、われわれ医療者が実際の患者にどのように提供していくのか、医療の最終的なゴールである患者の健康・QOLの改善に対する取り組みについて、それぞれの立場から解説する特集を企画していきたいと考えております。

平成から新たな元号に向けて一つの節目となる年です。今年が皆様方にとって、また透析を受けられている方々にとっても、よい年になりますことを心からお祈り申し上げます。